
ロリがJCで、JCがロリで

不足茶野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロリがJCで、JCがロリで

【Nコード】

N3147H

【作者名】

不足茶野

【あらすじ】

ごはんライス（現…ホラーエロス）先生の短編「ぶりぶりJCロリ華」のパロディです。この前、自分の作品が彼によってパロディーされた恩……仕返しですwロリ華と珍太郎の体が入れ替わっちゃったって話。

もう、珍太郎先生なんか大嫌いっ!!
あたしは珍太郎先生を突き飛ばして駆け出した。

ことの始まりは最近通り魔が出没するって話をあたしが珍太郎先生に振ったところから。

そしたら珍太郎先生「君が未成年の間は任せとけ」だって。
ホント、最低!

だから珍太郎先生を突き飛ばして駆け出そうとした。

「ちよっと、待ってロリ華——」

「いや、腕掴まないで!」

「少しは話を——あっ!」

珍太郎先生がふらつきながらあたしの腕を掴んだせいで、あたしもよろけてしまった。

さらに運の悪い事にあたし達は百段はある階段を上ったばかり。
階段を上りながらさっきの話をしていたの。

「あああっ、危な——」

「きゃあああああっ!!」

痛っ!

痛っ!

痛っ!

痛い!

痛い!

勢いあまって階段から転げ落ちちゃった。

必死に珍太郎先生にしがみついた。あたし。珍太郎先生もあたしにしがみついている。

何とか一番下段までたどり着いたけど、あたし達はしばらく気絶してみたい。

「あ痛たたたたっ、ロリ華大丈夫か？」

「う、うん……珍太郎先生も大丈夫——えっ!？」

珍太郎先生を見ていたはずのあたしの目にはなぜかあたしの姿が映っていた。

「とりあえず、冷静に考えよう。これはおそらくロリ華とオレの体が入れ変わったのだ」

「見たらわかるよ……珍太郎先生」

「なに？」

「あたしの胸を揉まないでください」

「え!？」

珍太郎先生は自分の胸（ロリ華の体）を自らの手で揉みし抱いていた。

「ほらほら気持ちいいか？　気持ちいいか？　あんあん、気持ちいいっつ!」

「止めて！　あたしがいないあたしの体を汚さないでえええっ」

「はっはは、征服感と気持ちよさが同居するなんて、まさに自給自足。JC最高っ!」

「珍太郎先生……そういうことは二人でしょうよ……」

「嫌だよ。こんなメタボリックに犯されるなんてごめんだよ」

自分で言ってるって傷つかない？

それにしても大変な事になった。

あたしと珍太郎先生の体が入れ替わったのだ。

「はっ、そうだ！　またあの階段を二人で落ちれば元通りかも？」

「嫌だよお。ロリボディを堪能するんだ!」

「珍太郎先生……」

全然、ことの重大さがわかってない！

むしろロリコンが、ロリコンボディを手に入れて、ロリコン妄想をロリコンの思うがまま、ロリコンのロリコンによるロリコンのための欲望を爆発させようとしているじゃん！

「まずは家に帰って、隅々まで観察して……」

「珍太郎先生、そんなことしなくてもいつも見てるじゃん」

「……そういえばそうだ」

しまった。別にところに火がついちゃったかも。

すると珍太郎先生があたしのカバンをあさり出した。

「珍太郎先生！ それあたしの！」

「今はあたしのものよウフ♪」

珍太郎先生はウインクしてあたしに応える。

ああ、あたしがやると可愛い。

……って自分に見とれてる場合じゃないや。

すでに珍太郎先生はあたしの携帯を使って誰かに電話してるし！

「あたし、ロリ華。しずかちゃん？」

珍太郎先生、電話の相手はあたしの友達のしずかちゃんじゃない！

「ねー、ねー、ロリ華と一緒に銭湯行かない？」

「え？ 家でゆっくりお風呂に入りたいからだめ？」

「じゃあさ、じゃあさ、あたしがアナタの家へ行くから一緒にお風呂に入る♪」

「え？……あたしがなんかキモい？ キモくないよお。エロいだけだって」

「え？ エロもだめ？ エロカワでも？ えー、駄目なの？」

あたしが、あたしが、壊れていくううううっ！！

「せ、珍太郎先生！ もう止め——」

ギュルルルル！！

うっ、お腹が痛くなってきた。

珍太郎先生の下痢癖をすっかり忘れてた。

さっきも神社のトイレを借りようとして階段を上っていたんだっ
た。

「あたし、ちょっとおトイレに……」

「しずかちゃん、あたし、ウンコ漏らしちゃったから、あなたの家
のお風呂で……え？ 駄目？」

「……」

そうだよ！ あたしだって胃腸が悪いんだから！！

……といっている暇もないのであたしは近くのコンビニのトイレ
に駆け込んだ。

――数分後。

何とか危機も脱出し、珍太郎先生のために換えのパンティを買っ
てコンビニをでた。

「あーすっきりした」

「ちょっと君」

「え？」

あたしを呼び止めた声に振り向くと、そこには警官が二人たっ
ていた。

そのうち五十代のおじさんっぽい人が話しかけてきた。

「さっきこの辺で女子中学生を追いついてる男がいるって通報が
あつてね」

「はあ、そうですか。大変ですね。それじゃ」

あたしは最高に可愛い顔をして立ち去ろうとした。

でも！

「待ちたまえ！ 気持わるい」

警官はあたしをメッチャ見てるしっ！

なんであたしを？ ……あ。あたし、今は珍太郎先生だった。

どうやら珍太郎先生の後を付いて歩いてたから、近所人が通報し
たんだ。

しかも、換えのパンティなんて手に持ってるしっ！

「違うんですあたし……」

「最初は誰でも違うって言うんだよ」

「いやいや、無実。あたし達は本当に愛し合ってるんだから」

「いい年して、くだらない事を言うんじゃないじゃねえ!!」

「ひっ!」

警官の怒鳴声、お腹に響くよお。

駄目だ、足が震えて動けない……

「アンタねえ、あんな幼い子じゃなくてもっと年相応の……」

警察官の人ってやっぱり怖いよお……珍太郎先生……

珍太郎先生、いつもこんな職質を受けながらあたしに会ってるの？

あたし、子供だからそんなこと知らずに……

やっぱり大人と子供が付き合うには障害があるんだ……

するとなんだか勇気が湧いてきた。

あたしが怖がってどうするんだ！

今はあたしが守ってあげなきゃ珍太郎先生の面子がたたない！

よし! ここは珍太郎先生みたいに振るまわなきゃ。

ここは……きつと珍太郎先生ならこういうはず!

「年相応? そんな年増は嫌です!」

「君い!!」

「オレはロリコンなんですから」

いつもあたしに言ってくれるもんね。

だから堂々と言うの。愛の証。

でも、警官は――

「た、逮捕だああああっ!!」

「ええええっ!?!」

通じてない!?!

やっぱり、大人には理解されない世界なんだ。

あたし達はやっぱり不純なの!?!

拳を上げる警官にあたしは頭を抱えて震える事しかできない。

助けて！ 珍太郎先生っ！！

「こっちだ！ ロリ華」

「珍太郎先生！」

あたしの姿をした珍太郎先生はあたしの手を掴んで、逃げてくれた。

突然の女子中学生（珍太郎先生）が登場したことにより、呆然とする警官を尻目にあたし達は逃げる事ができた。

「ひっく……ひっく……怖かったよお……」

泣きじゃくるあたしをJCな珍太郎先生が慰めてくれる。

「ロリ華、あそこはとりあえず謝っておくか、射殺すれば良いんだよ」

あたし達を奇異な目で通行人が過ぎていく。

そうか……今はJCがメタボリックを慰めている図にしかみえないんだ。

「……大人って大変だね」

「まあ、責任ある大人は色々大変なんだよ」

「うん……」

なんだかんだ言っても珍太郎先生はあたしを守ってくれた。

ちよっと心強いなって思う。やっぱり大人だ。

「珍太郎先生……あたし怖いよ。このままあたし達生活しなきゃいけないの？」

「うーん、どうだろうね。しばらくはこのままがいいかも」

「そんなの嫌だよお。大人、怖いよお」

「あゝあ、普通は早く大人になりたいとか言うもんだけどなあ」

声を上げて泣くあたしを珍太郎先生は頭を撫でてくれた。

それだけで少し落ち着いてきた。

「そういえば珍太郎先生？　もう、しずかちゃんの事は良かったの？」

「ロリ華を放っておくなんてできるわけないだろ」

「せ、珍太郎先生！」

「だって、今みたいにないつオレの体が職質受けるかわからないんだから」

「――っ！！」

「ん？　どうしたの？　ロリ華？」

「最低！」

あたしは力いっぱい珍太郎先生をひっぱたいた。

いつもより力強く手を振りぬくと、いつもより軽い衝撃で、いつもよく珍太郎先生は吹き飛んだ。

「ふごっ！」

「ああっ、あたしを殴っちゃった！」

大人の体って力強い！

でも、倒れこむあたしの体をみて、やりすぎちゃったと後悔する。

それでも、それでも！

珍太郎先生のあの言葉は許せない！！

私より自分の体が大切だっていうの！？

「もう知らないっ！」

あたしは駆け出そうとした。

しかし、すぐに人とぶつかり、あたしは尻餅をついた。

「……っ、痛ってえな。なんだよ、汚いオッサンじゃねえか」

あたしが見上げると、そこには目の前にバンダナ。皮グローブ、チェックの上着にリュックを背負ったオタクが立っていた。

しかも手にはナイフを持っているじゃない！

「いやああああっ、なんでこんなところに冒頭で話題にした通り魔がああああっ」

「説明ありがとう、そうですあたしが変なヲタの通り魔です」

「都合良過ぎるよお！ ご都合主義だよお」

「つか醜いオッサンがなに気持悪い声上げてるんだよ」

あたしの声を聞きつけた珍太郎先生がすぐに駆けつけてくれた。
良かった、珍太郎先生が来てくれて。

「ロリ華っ」

「珍太郎先生っ！」

「なっ、なぜこんなオヤジにJCが！」

「ロリ華の体には指一本触れさせない！」

「今は私のほうが大人でメタボリックな体だけだね」

「このロリコンが！！」

通り魔は珍太郎先生をみた途端、震えだした。

さらにナイフを強く握り締め、大声をあたし達へ上げた。

「ロリコンは悪っ！！ 二次元は正義！！」

「なにその偏見は」

「ロリコンのせいで二次元愛好者が誤解されてるからだ」

なにやらロリコンに対する私怨があるみたい。

続けて通り魔は大声を上げる。

「だからロリコンは悪っ！！ つるペタは正義っ！！」

「そこにどんな差があるっていうの！？」

はっ。あたしは思わず突っ込んでしまった。

あたしの問いにすかさず珍太郎先生が答える。

「ボインのロリもあるからだろう？」

「別に解説いらないけどね」

「通り魔の言う事は気に食わんが、「つるペタ」の「つる」部分には納得がいく。やはり毛が生えたら終わ——」

「珍太郎先生！ 中学生の格好でそんなこと言わないでっ！！」

「へへっ、どうせ俺みたくヲタの見本みたいな奴が変質者扱いなん
だろ？ ゲーム、マンガのせいにしておけばお前ら安心なんだろう！」

「まっ、無難だよな。この犯罪予備軍がつ!!！」

珍太郎先生、刺激しちゃ駄目だって!

「通り魔、どうせお前は国家規模でエロ規制されたって文句言えないだろ、ヘタレだから」

「なっ……」

「オレは逃げんぞ。この通りメタボリックのロリコンだ」

「いや、どう見てもお前は女子中学生だろ」

はっ、この場合はあたしが言うべきでは?

今、あたし大人なんだから、いつもの珍太郎先生みたく話せば……

「見てろ政府! ロリ規制しやがったら、オレがテロ起こしてやる

! ロリテロを起してやるっ!」

「さすがロリ華。よくわかってるな」

嫌あゝ!! 本当に珍太郎先生みたいなこと喋っちゃった!

「わかったかこのヲタ野郎。お前はステレオタイプな犯人像なんだ。観念しろ。日本の中でも選りすぐりの変態民族、ロリコンをなめるなよ!!」

「だからお前はどうみても女子中学生だろうがつ!! だいたい中学生でロリコンってなんだよ!」

「うるさいなあ、世間と向き合う気もなく、弱い奴らを傷つけるしか生きるすべがないくせに」

「うっ……」

すごい、珍太郎先生がナイフを持った通り魔を気迫で押している!

珍太郎先生、どんどん言っちゃって!

「逃げてばかり。三次元が駄目なら二次元か?」

「珍太郎先生もダイエットから逃げてばかりだよね」

「……チッ」

わっ、今軽く無視された!

しかも舌打ちっ!

すると何も言えなかった通り魔がついに感情を爆発させてきたの!

「オレ達は二次元へ逃げたんじゃない！ 二次元を選んだんだ！！」
醜い開き直りっ！

「だからオレは二次元を守るっ！」

「負けるかっ！ ロリコン王にオレはなるっ！！」

女子中学生の格好でこれでもかいうガッツポーズ！

通り魔も負けてないよ！ ナイフを突き上げて叫んできたよ！

「三次元は消えろっ！ だから可愛い三次元は殺すっ！」

「あたしが殺されるの！？ 意味がわかんないよう！」

「メタボリックの癖に可愛い言い方するな！」

はっ、あたしは今珍太郎先生の体だった。

しかも、可愛いに反応しちゃった……エヘヘ。

「大体、なんだお前は。いい歳したメタボリックのくせにこんな可愛い女子中学生と付き合いやがって！！」

すると、すかさず珍太郎先生が合いの手を入れた。

「どうだ、羨ましいか！」

「羨ましい！！ ……はっ」

「二次元だとか言っというてそれかよ」

「くう……こうなったら、オヤジ！ 殺す！」

「何であたしいいっ！？」

飛び掛る通り魔にあたしはさっきぶつかって転んだままの姿勢から動けない。

——殺される！！

あたしは痛みに耐えるために目をつぶった。

きつと痛いんだ！ 尖がったアレが刺さるんだ！

痛い！ 痛い！ 痛……あれ？

いつまでたっても痛みは来ないのであたしは薄目を開けた。

「何でこんなオヤジを庇うんだ……」

「うるさいな。好きなんだから当たり前だろ」

あたしの前には珍太郎先生が通り魔とあたしの間に立っていた。
珍太郎先生越しに見えた通り魔のナイフは赤く染まってる!!

「くっ……」

珍太郎先生は腕に切り傷を負ってしゃがみ込んだ。
傷口を手で押さえて、歯を食いしばっている。

「珍太郎先生、（とあたしの体!）大丈夫!？」

「……大丈夫、こんな傷平気さ」

良かった。

でも、ホッとしたら何だかわからないけどすぐにムツと来た。
だってそれあたしの体じゃん!

身を挺して助けてくれるのは嬉しいけど、嬉しくないっ!!

「いいだろう、おっさんの前にお前を殺してやる」

「やれるもんならやってみろっ!!」

通り魔がまたナイフを振りぬくと今度は珍太郎先生の太ももに傷が入る。

「んぐっ!!!!!!」

「（あたしの体と）珍太郎先生、もう止めて!」

はっ、順番が逆だった。

つい自分の身を案じてしまった!

太ももから血を流しながら珍太郎先生は通り魔に叫んだ。

「この体はもちろん大切だが、もっと大切な事があるっ!」

そう言っであたしへ振り向き、力の籠った視線で見つめてくれる。
あれだけ大事にしてたあたしの体を盾にしてでもあたしを守ってくれてる。

これっであたしを大切に思ってくれてるの?

……それとも自分の体が大切なのか?

「大人は子供を守らなくちゃいけない! それはロリコンでもヲタでも関係ねえ!」

「だからお前はどうか考えても中学生だろ!!」

珍太郎先生は近くにあった手ごろな石を掴んでいた。
ナイフを突き立ててこっちに向かってくる通り魔を迎え撃とうと
構える。

「セーブザチルドレン！　ロリコンよ永遠なれ！！！」
言ってる事無茶苦茶だよ！！

でも、あたしは大きく息を吸い込んで、力いっぱい叫ぶ！！

「珍太郎先生、頑張ってええええええっっ！！！！！！！」

「うおおおおおっ！！！！　ロリ華はオレのおもちゃだあああああ
あっ！！！」

え？　オレの女じゃないの！？

そして目の前で通り魔と珍太郎先生が交錯する。

二人はもつれ合いながらあたしの横をかすめて倒れこむ。

「珍太郎先生っ！！！」

あたしは急いで珍太郎先生に駆け寄る。

くそっ、走りにくい！！

お腹が邪魔する！！

メタボリックの馬鹿あ！！

珍太郎先生の近くで倒れている通り魔は頭から血を流し、倒れて
いた。

やった、珍太郎先生が倒したんだ！

後は珍太郎先生が無事であれば……

「あれ……珍太郎先生？」

珍太郎先生がうつ伏になってピクリとも動かない。

「珍太郎先生？　先生っ！！！」

珍太郎先生の体を引っくり返すと、お腹にナイフが突き刺さって
いた。

あたしが慌てて手を握ると、珍太郎先生はとても冷たかった。

ビククリして手を離すと、だらりと地面に落ちた。

「嫌だよお……嘘だよね？　珍太郎先生……嫌あああああっっ！

「！」

そして、あたしは泣きながら珍太郎先生を背負って歩いている。
あたしが大人の体だから女子中学生の体はすごく軽い。

珍太郎先生が前にあたしを背負って「軽いよ」って言うてくれた
時、あたしは信じなかった。

「珍太郎先生……本当に体軽いね。ゴメン。あの時拗ねて後頭部に
頭突き食らわせちゃって……」

向かっているのは……あの時の百段はある階段。

あそこで入れ替われれば……珍太郎先生は助かるよね。

そして、あたしは代わりに……

珍太郎先生を背負いながら見つめる百段はちつとも怖くなかった。
あたしだって大人を救う事が出来るんだ。

子供にだって好きな人を救う事はできるっ！！

階段に向けてあたしは足を踏み出した！

痛っ！

痛っ！

痛っ！

痛い！

痛い！

階段は痛いけど！

あたしの心はもっと痛いよお……

何回転かしたところであたしは気を失ってしまった。

そして体が入れ替われれば、もう気づく事も無いか……

「……あれ？」

でも、あたしは目覚めてしまった。
体中の痛みをおして、起き上がる。
相変らずのメタボリックなお腹。

——そんな。

さらに視界の端に何かが横たわっているのがわかる。
あたしはゆっくり顔を向けた。

すると、そこには真っ白な顔をしたあたしがいた。

——失敗だ！

「うあああああああああああああああつ！……！！！」

あたしは自分の体にすがりつき、声を上げて泣いた。

珍太郎先生、生き返ってよ！！

もう、胸もんでも怒らないから！

しずかちゃんとお風呂入ってもいいから！

このままの姿でもいいから！！

「珍太郎先生——————————っ！！！」

でも、声なんか返ってくるはずもなく……

「は——————————————————っ！！！」

「えっ！？」

誰かが階段から降りてくる。

そんな……まさか！

「いや、驚いた、驚いた」

「ち、珍太郎先生？」

奇跡が起こった！！

パッと心が明るくなり、あたしは振り返る。

しかし、目の前に映ったのは頭から血を流して笑顔で駆けて来る

通り魔だった。

「あ……」

もうおしまいだ。

殺される。

あたしは震えが止まらない。

「オレだよ、オレ。珍太郎」

「……へ？」

「さっき、変質者とぶつかった時に入れ替わったみたい」

「うそ……」

「ホントだよ」

あたしの瞳がすぐに潤んできて珍太郎先生がよく見えない。
でも、わかる！

珍太郎先生がすごく笑顔だって！

「珍太郎先生ええええっ！！」

あたし達は抱き合った。

涙でクシャクシャになった顔を擦り付ける。

そして濃厚なキスをした。

最初は軽いキスを数知れず。

その後、お互いの唇を甘噛みして感覚を楽しむ。

もちろん舌もベロベロに絡ませて、唾液で糸引くぐらいに。
すぐく二人の武将……いや、お互いの不精ヒゲが痛いです。

「ロリ華、一生離さないよ」

「ち、珍太郎先生……」

嬉しい！

あたし最高に幸せ！！

このまま結婚したいぐらい！
でも……

「せーんせ♪」

「何？」

「っーか、あたしの体返せやゴラアアアアアアア1!!」

完

(後書き)

簡単ではなかった。パロディーになってない(汗
書いててわけがわからなくなりました。(反省

すでに原形とどめてません……

このキャラ達を操るごはんライス(現…ホラーエロス)先生はすげえよ。

ぶりぶりJCロリ華で、ロリ華がウンコ漏らしちゃって焦るんだけど、珍太郎もウンコ漏らしてて、それが珍太郎のロリ華に対する気遣いか、単なる偶然かわからない、ということで揺れるロリ華の気持が僕は好き。

それと本当に珍太郎は良い人なの？悪い奴なの？って不思議なところも好きです。

だから今回は私が好きなの？自分の体が大切なの？ってところで揺れる心を書きたいな！と考えました。

それには性転換がバッチリだと思ったわけで。

やるだけのことはやった。うん、楽しかった！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3147h/>

ロリがJCで、JCがロリで

2010年10月8日14時21分発行